

たかのす

人口と世帯数

9月30日現在		(前月比)
総人口	25,357人	(28人増)
男	12,328人	(9人増)
女	13,029人	(19人増)
世帯数	7,019世帯	(6世帯増)

編集と発行 鷹巣町役場総務課広報係



No. 372

52・11・15

働く若者

ガソリンスタンドで働く斎藤陽子さん(綴子下町・22歳)。彼女は、高校卒業と同時に東京の金融機関に就職。この三月まで丸四年間働いたが、三人兄弟の一人娘だけに両親の愛情が深く、町に帰って来るようにとの要請でUターン。この四月から現在の会社に入社。一般事務と給油の仕事に励んでいる。

お客さんと接する仕事を続けてきただけに礼儀が正しく、受け答えもしっかりしている。

東京では習いものができなかったのが、町に帰ってからは着付けと生花を始めたという彼女に、好きなタイプの男性を聞いてみると、「別にないが、誠実で包容力のある人」と、答えてくれた健康なお嬢さんだ…。

西小で百周年と健康優良校記念式典

高きめざしさらに飛躍を

＝ブロンズ像の建立や記念誌を発行＝

西小学校（高田政男校長）の創立百周年と全日本健康優良校受賞の記念式典が、十月二十三日午前九時三十分から同校体育館に児童二百三十九人のほか、来賓や関係者などおよそ七百人が出席して盛大に行われました。

同校は、昭和四十六年三月三十一日に坊沢、七座、黒沢、緑ヶ丘の四小学校を廃止し、同年四月一日新たに西小学校として発足したもので、百周年は、統合した四校のうちで最も創設の早い坊沢小学校の創立を起点に開いたものです。

ちなみに、統合した四校の創立期をみると、坊沢小学校は明治十年八月永安寺に創立。緑ヶ丘小学校は同十六年八月に大野尻大向、蟹沢に巡回授業所として開設され、その後坊沢小学校緑ヶ丘分校から昭和三十一年四月に独立校となっています。

黒沢小学校は明治十三年十二月坊沢学校の分教室として開設され

同二十二年は七座簡易小学校の分教室、同四十五年二月黒沢尋常小学校として独立。七座小学校は明治十五年、前山に鷹巣学校巡回授業所として創設され、同二十二年に七座簡易小学校として独立しております。

昭和四十六年四月に四校が統合した西小学校は、同年八月から校舎の第一期工事とグラウンド拡張工事が始まり、四十八年二月に鉄筋コンクリートの現校舎が完成しております。

統合した西小学校は、着々と教育効果をあげ、五十年には全県小学校バレーボール大会で男女とも優勝したのを始め、全県スキー大会の優勝など、多くのスポーツで西小の名を全県にとどろかせ、健

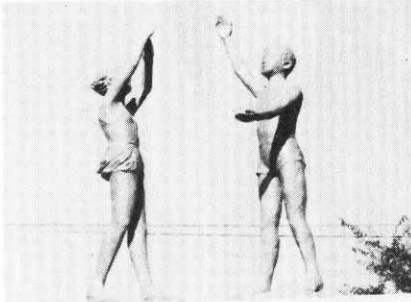
康教育で文部大臣表彰や数々の全国表彰を受賞。中でも五十一年、五十二年と二年連続して全日本健康優良校の荣誉に輝いております。同校のこのような荣誉は、教師児童のたゆまざる努力と、地域住民の教育に対する熱意のあらわれとして、関係者から高く評価されています。

式典では、高田校長のあいさつに続いて藤原愛県教育委員、出川町長ら来賓が次々と西小の数多い荣誉に對し祝辞。児童会長仲村孝行君が児童を代表してよろこびのことばを述べて式典を終りました。式典後のアトラクションは、児童のマンダリン演奏、今泉の駒踊り、黒沢の番楽、坊沢の獅子踊りなどを披露。続いて祝賀会を開き、西小学校の一層の発展を誓いあっていました。

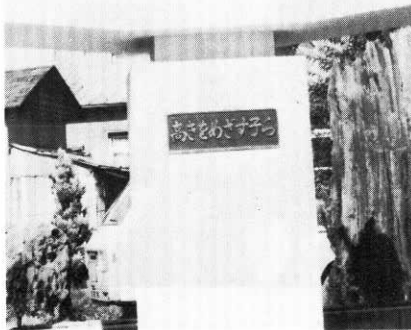
なお、同校創立百周年記念実行委員会では、記念事業としてブロンズ像の建立、植樹、記念誌の発行などを行っています。



喜びの式典



百周年記念ブロンズ像―高きをめざす子ら



町長 日誌

10月1日～10月31日

17日 民生委員制度五十周年記念のつどい

18～20日 全国市町村長中央研修会―東京都

21日 農業構造改善事業全国会長会議

23日 西小学校創立百周年記念式典

24日 県町村会建設委員会道路視察

25日 南中学校創立三十周年記念式典

26日 町内建設現場視察

27日 決算特別委員会

28日 合川町役場庁舎竣工式

29日 へき地診療対策事業打ち合わせ会

29日 墓地公園造成地視察

31日 長崎佐太吉、鷹巣庭球クラブ文部大臣受賞祝賀会

議会 日誌

10月16日～10月31日

21日 決算特別委員会

24日 北秋田郡町村議会議長会臨時総会

24～27日 決算特別委員会

27日 合川町役場庁舎竣工式

31日 町議会臨時会

たばこは町内で買います



町営住宅16戸完成

＝公募は6戸だけ＝

南鷹巣団地に建設をすすめていた町営住宅十六戸が完成しました。完成した住宅は、簡易耐火構造二階建て、一戸当りの面積は五十四・九九平方メートル、それに三・九平方メートルの物置。一階は台所兼居室、洗面所、浴室、便所。二階は六畳と四畳半の二室となっています。住宅が完成したことにより、入居者を公募することになりましたが、昨年度から始まった南鷹巣団地再開発後期五カ年計画により、来年度解体が予定される十世帯が特定入居となりますので、公募は六戸となります。

新しい住宅に入居を希望される方は、下記の募集要領により申し込みください。

南中は30周年!!

南中学校(三沢孝一校長)の創立三十周年記念式典が、十月二十



五日午後一時から同校体育館に生徒二百十三人のほか、来賓や関係者などおよそ二百人が出席して盛大に行われました。

同校は、昭和二十二年学制改革にともない七日市中学校として発足、三十五年に鷹中沢口校舎と統合して南中学校となり、四十一年には竜森中学校も吸収して現在に至っておりますが、この間、スポーツでは女子バスケットボールが全県優勝。道徳教育では文部省指定研究校となるなど大きな業績をのこしております。

東保育園長に松尾精一氏

東保育園長田村栄さんの死去にともなう後任の園長に、十一月一日付けで松尾精一氏(60)を発

令しました。

町議会だより

廃棄物の処理及び清掃に関する条例の一部を改正

第八回臨時町議会は十月三十一日開かれ、廃棄物の処理及び清掃に関する条例の一部を改正することについてを審議。原案どおり決定して閉会しましたが、各議員からは、し尿くみ取り業者の自粛自戒とサービスの向上についての意見が強くされました。

なお、改正された内容は、し尿のくみ取り「リットル当り三円以内」を「リットル当り三円七十銭以内」に改めたもので、施行は、五十二年十一月一日からとなっております。

町営住宅の入居者を募集

昭和五十二年建設の町営住宅へ入居を希望される方は次のことがらをお含みのうえ応募ください。

- ▽住宅の所在地
鷹巣町鷹巣字平崎上番地十三番地の二の内(南鷹巣)
 - ▽住宅の種類、構造、面積
第二種簡易耐火構造二階建て、四棟、計十六戸。
一戸当りの床面積五十四・九八平方メートル(外物置三・九平方メートル各一棟つき)
 - ▽応募戸数
十六戸のうち六戸
 - ▽家賃
月額一万四千五百円
 - ▽申し込み資格
1 現に同居し、または同居しようとする親族のある方(婚約者を含む)
2 同居親族の過去一年間の所得金額から扶養親族一人につき二四〇、〇〇〇円を控除した額を十二で除した額が四万七千円以下であること。
 - ▽申し込み受付期間
昭和五十二年十一月五日から十一月二十一日まで。
 - ▽申し込み場所
鷹巣町役場建設課計画係(入居申し込み書も計画係で交付しています)
 - ▽入居者抽選の日時と場所
昭和五十二年十一月二十四日午後一時
鷹巣町役場三階大会議室
 - ▽入居可能予定時期
昭和五十二年十一月二十六日頃
 - ▽その他
1 以前に町営住宅入居者申込書を提出し、まだ入居許可にならない方で、今回の住宅に入居希望される方も改めて申し込み書を提出してください。
2 申し込みについて不明な点は、建設課計画係へお問い合わせください。
- 昭和五十二年十一月五日

鷹巣町長 出川 礼一

精いっぱい生きた青春

戦争中の体験語る

特集

この特集は、戦争中の生活の記録です。戦争、それはいま思うと言語に絶する暮りであった。

第一線で戦闘を続ける兵士はもちろん、銃後を守る婦人や児童もまた、毎日のように隊列訓練や消火演習、松根油とり、増産のための畑作りと、すべての人が体力と精神力のぎりぎりまでもちこたえて生きてきた。肉親を失い、大事な人を失い、青春を失いながらも……

しかし終戦から三十三年、こうした思い出は心の底ふかく沈み、語られることも少ない。こんな中で去る九月十四日、当時七座国防婦人会長を勤めたという鹿児島の津曲タメさん(83)から、出征兵士が戦地から送った封書やハガキ二百八十六通が役場に送られた。そのほとんどは、出征兵士に慰問袋などを送ったのに対する礼状で、戦地での具体的な生活状況は記されていない。

そこで、これを機会に当時なにを苦しみ、どんなふう生きてきたかをふりかえってみるのもと思い、戦争中の生活の記録を特集してみることにした。

既に、戦争を知らない世代が半数以上を占めるわが町。この人たちはどんな気持ちでこの時代を生きてきたことだけは知ってもらいたい。できることなら、茶の間の話題として当時をふりかえり、物質豊かないまの生活の見直しにでもなれば幸いです。



七座国防婦人会

前列、左から四人目が津曲タメさん



婦人会の隊列訓練

男子は戦争へ、婦人は銃後を守る軍事訓練に、消火演習にと忙しい毎日を送った。

八年間、外地で兵役

今 泉 簾 内 政 雄 (62)

国敗れて山河あり、ということばのごとく戦争に敗れ、身ひとつで鷹巣駅に下車し徒歩で今泉の我家にたどりついたのは、昭和二十年の末頃でした。出征当時は村をあげて送ってくれたのに反して、とても淋しい帰還でした。

以来、軍隊のことなど自分から話題にしたこともなく、また書いたこともなかったのですが、このたび鹿児島島の八十三歳の老婦人から支那事变当時のお札の封書二百八十三通が役場に送られ、その中に私の手紙もあるというので見ていただきました。

内容を読んでいるうちに、過去の思い出が夢のように浮び、私の戦争の一コマを書くことになりました。たぶんこの手紙は蘆溝橋(支那事变発端の地)の激戦後、北京付近の警備についていた頃のように思われます。今から四十年も前のことです。

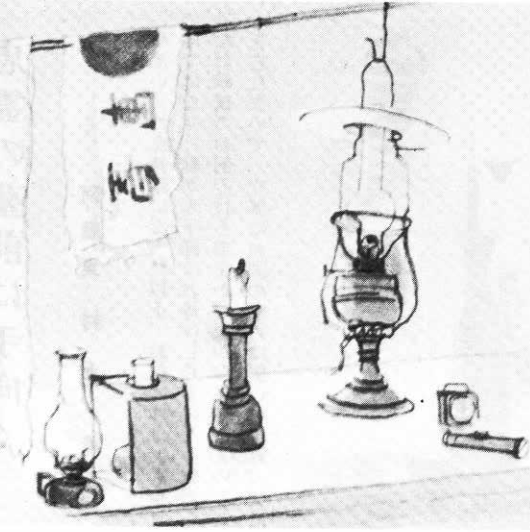
現役兵として秋田に昭和十一年一月十日に入営し、その五月七日には支那駐とん歩兵第一連隊に編入され、星一つの二等兵で新潟港を出帆、玄海灘を越えて北支の豊台についたのは五月の三十日でした。戦前のことですので平和そのもので、珍しい北京付近の風物に接し、居留民保護の任務についておりましたが、昭和十二年七月七日、突然支那二十九軍の蘆溝橋における一発の銃声に端を発して支那事变が始まり、大東亜戦と拡大されていったわけです。以来七年八カ月の長きにわたり、若い青春時代を戦争に明け暮れることになったわけです。

はじめに上海に上陸、北支、中支漢口、南京と休む間もなく揚子江をさかのぼり、ほこりと炎暑に悩まされ、行軍と戦闘につかれ、疲労も限界の極に達し、戦友はつきつきに倒れて行く情景は、とても現在の人達に知っていただけない悲惨なことの連続でした。昭和十三年十月二日揚子江の平野部では稲が黄色に熟していた頃です。この頃、武漢の戦闘も激しくなり、簞溪という要塞の地の戦闘で私も全身に負傷し、南京、上海と後送される身になったわけです。この戦闘では我が中隊も百八十名の戦力が四十名の戦力に低下し、激戦の激しさを物語る事ができると思います。

その当時、戦争は私共にとって何んであったのだろうか。二十歳になって徴兵検査を受け、甲種合格という判定を受けると、国民の義務として厳しい兵役の義務が負わされたわけです。国家に対する最大の奉公であり、村をあげてその名誉をたたえたものです。今では考えられないことでしょう。しかし厳しい軍隊生活のなかにも見も知らぬ人達と過し、生活を共にし、親兄弟以上の交わりを結び今日に至っている人を数多くあります。

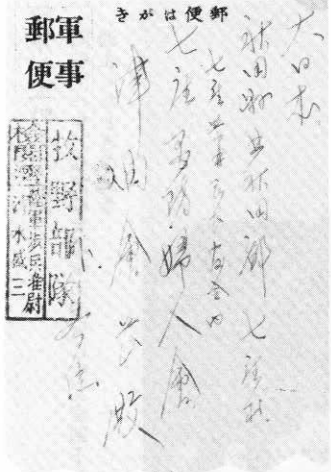


軍事郵便絵ハガキ



凡そ人と人との交わりというものは、その当時者同志の意志に基づくのが当然と考えられますが、職業軍人は別として、私共一般のものはいずれも自分の意志を完全に無視されて軍人となり、全く見ず知らずの人達と生死を共にする交わりを結ばされ、そして命令ひとつでいつどこにも転属され、別の組織の人と組み合わせられるかわからない。そのうえ、誰れもが明日の生命を知らない運命にある。普通ならば服従する義務、頭を下げる義理もないのに、人々の命令に絶対服従し、反対にアカの他人に向って命令したり叱責したりもする。しかも人と人との感情や意志を全く無視して行われ、兄弟以上に親しくなった間柄でも、命令ひとつで永久に離れ去ることが何んの疑いもなく実現する。これはどういう縁に結ばれた戦友同志や上官と部下が、生涯忘れ得ない心の交わりを生ずるといったことは一体どういうことだろうか。

個人の意志というものを何よりも尊重する現在では、全く考えられぬことです。戦場では多くの友達が戦死をしたこれらの人々とは平素私とはごく縁のうすい人々でありましたが、今だに亡くなった肉親のように、その在りし日を偲び、その死が悼まれるのはまぎれもない事実であります。近くのたった一人の友人長谷川栄次郎君は農林の同級生で、北京郊外の清華大学と一緒にいたが、彼は河南省の方に転属になり、一杯呑んで別れたのが最後で戦死してしまつた。私の青春はこのようにして過ぎましたが、今にしてみれば、尊い得難い体験だったと思います。今でも生死を共にした人達は全国に散在しておりますが堅い交際を続け、戦争を体験した人達だけでなければわからない会合を続けております。



切手のいらぬ軍事郵便
検閲済の印も押されている

忠霊の墓前に手向く

南 藤 巢 村 上 薫 (73)

男がいったん兵隊になった以上、お前の体はお前自身の体ではなく、私が天子様にお捧げしたものだ。親たちはただ銃後でお前の行く末をかげながら見守っていることを忘れないで、立派にお国のために働いてくれ。父は



婦人の射撃大会
昭和十三年 陣場岱で

ただただ、そのみを神かけて祈っている。

これは戦時中、大館の佐藤忠蔵さんがわが子大八郎軍曹に駅頭でおくったはなむけの言葉であった。落下傘部隊を志願し、「人生は二十五まで」と短命に終止符を打ってパレンパンの降下部隊に参加し、人間爆弾となって石油資源地を奪取したのでした。こうした天子の赤子を育てた母セキさんも、武人最高の榮譽に輝く愛児の光榮を聞いた時「よくやってくれた」と、涙一滴も落さなかったという。

私は朝日新聞にいたので当時「忠霊の墓前に手向く」という題で署名入りで書いたことがあった。もう一つは花岡町姥沢の鈴木鉄雄さんと遠縁の北海道夕張町の鈴木ソノさんの婚約なり、披露宴を」といふ瀬戸きわに鉄雄さんが名譽の応召、壯途を送ろうと未知の夫となる人を訪ねたが、ときすでに遅く鉄雄さんは出発のあとだった。爾来ソノさんは留守を守り武運長久を祈っているうち翌十五年四月、名譽の戦死の公報に接した。その時実情をよく知る花岡役場の畠沢正氏が、ソノさんに婚前だから他に縁づいてはとすすめたが、孤独の英霊を守るのが日本古来の婦道の精神です」と、いよいよその本領を發揮し、未知の夫の写真をふところに悲しみを超脱して奪起し、家門の譽を永久に維持することに、靖国の神に祀られるや、亡き夫の育ての親サメ婆さんと上京、靖国の社頭で暗れて対面、正式に英霊と結婚したのでした。この話題も私が「軍国の処女妻物語」として報道したので、当時鉾山町では「大和撫子」として深い感銘を与えたのでした。

わが国は、神武の昔から国民皆兵で、上古は戦争の際いつも畏れ多くも天皇親ら兵をひきえて陣頭指揮であった。三千年の歴史を呼及する軍国主義教育で育った国民には決戦下の「撃ち止まむ」の熱血が脈々と流れていた。持久戦とあってあらゆる資源は不足がちになると鷹巣地方では地下に眠る亜炭の採掘で坊沢、栄、七日市、沢口地区が事業化され、各家庭では空地を利用した家庭菜園に鎌を握って聖恩にこたえんとしたのであった。

戦争が深まるにつれて馬も兵器だというわけで農耕馬も赤紙応召になって農家は食糧基地としての役割を果すことが不可能になるのを見込んだ今泉の籾内多蔵さんは、当時在郷軍人分会長で郵便局の局長さんだったが、農耕馬代用に和牛の導入を目指し、九州から大量購入しようとした時、

陸軍が大野台で演習

昭和十一年、弘前騎兵連隊の演習に秩父宮殿下をお迎えしたときの風景



軍部から貨車の使用禁止をくったが食糧基地には老人と女のみで増産には馬に代る和牛が必要なのだと言き伏せて見事成功した。それで和牛組合を盛んにし牛神社をつくって自ら別当になったことも有名な話題となった。

九死に一生を得て復員

綴子上町 高橋 七郎 (59)

昭和十三年九月三日付で、秋田連隊区司令官から現役兵証書が送られてきました。その証書には

現役兵ニ徴集シ左ノ通り入団ヲ命ズ

一、入団部隊 横須賀海兵団

一、入団部隊所在地 横須賀市

一、入団期日及時刻 昭和十四年一月十日午前七時とあります。

昭和十四年一月七日、戸口三寸出られないほどの猛吹雪の日でした。「祝入団高橋七郎君」と書いた一丈位ののぼり十本ほどを親せき、友人、村の方々に立てていただき、綴子小学校のプラバン隊も加えて約五十人で曲りくねった細い雪道を送ってくださったことも、今でもとても有難く



高橋さんの戦歴手帳

思っています。駅頭ではのぼりや日の丸の小旗で、見送り人だけでなく他町村の人たちもいて鷹巣駅はいっぱいでした。どうしてそうなったか、私が入団兵を代表してお礼のあいさつを述べることになりました。「皆さん、銃後の守りをしっかりお願いします。」と言ったことを記憶しています。

昭和十四年一月十日、横須賀海兵団に入団ここで六カ月の新兵教育を終え、航空母艦「蒼龍」(長さ二百二十メートル)に乗艦を命ぜられました。そして昭和十六年十月、海軍工機学校入校のために退艦しました。その間、台湾、海南島、福州、廈門などの台湾海峡における支那事変に戦務しました。

同校を翌十七年五月卒業。直ちに連合艦隊所属、飛行艇母艦「秋津洲」に乗り組みましたが、慌しく戦地に向い、そしてソロモン海戦、第二次ソロモン海戦、南太平洋海戦等に従事しました。当時の激戦については、とても書き表すことができません。海軍々神山本五十六長官もこの時期になくなりました。十八年八月、再び工機学校に入校のため同艦を退艦。十九年二月同校卒業。そして最後となった四号海防艦に乗艦したのです。

同艦は輸送船団の護衛が任務で、主としてソロモン群島のラバウルを中心に任に当たりましたが、昭和二十年七月二十五日午前四時より三重県の鳥羽沖において三日間続いた敵飛行機と交戦、物量で誇る米軍グラマン戦闘機延約百機におよぶ猛爆撃を受け敵弾のためたおれました。艦橋からなだれのように崩れ落ちる戦友。助けてくれ〜と叫ぶ声になにもできないまま、二十八日午後二時ついに我が海防艦が沈没したのです。

また、前記の蒼龍(乗組員約一千二百人)は、ミッドウエー海戦で昭和十七年六月六日敵戦闘機により撃沈。秋津洲(乗組員約六百人)は、ミンドロ島沖海戦で昭和十九年九月二十四日敵艦砲撃により沈没してしまいました。

以上のように海軍生活は約七年でしたが、特に感激したことはありません。特にということになれば、四号海防艦乗り組み中に「敵潜水艦および飛行機の跳梁下、常に勇敢奮斗敵潜水艦四隻を撃沈せるは武勲拔群なりと認む」として、海上護衛司令長官より感状を授与されたことでしょう。「九死に一生を得て」といいますが、私の場合にはまさにそ

出征兵士の壮行会：



うだような気がします。昭和二十年八月、終戦と同時に私も復員したのです。

留置所で妹が死亡

有楽町 中島喜代(56)

昭和十八年私達は結婚して満州国通地省臨江県八道江渾江と言う所に家庭を持ち、主人は満生計事務所、私は吉林鉄道局保健課に保健婦として勤務、渾江駅に在勤を命じられ沿線の鉄道職員家族の診療に廻って居りました。

毎日の生活は誠に楽しく、不便な生活器具の中から主人は工夫して生活の知恵を出し、私達は数年でしたが新婚生活を過したものでした。然し内地からの便りには次々と若い人達が召集になった事、戦死した事などが書かれ、実家の兄も弟も召集され父母兄弟が細々と勝つまでは...との便りを見る時満州はまだまだなごやかで何処で戦争をやっているのかと思う事が多々ありました。

然し昭和二十年ソ連が戦宣布告、以来満州は一変して色々な制約がされ始め、物資の配給制度も更にきびしさを増し外出も禁止、預金も下ろす事も出来ない社会状態になり事務職員が年令の区別なく次々と召集されて行きました。私も何時かはと、かくごはきめておりましたが、八月五日に主人中島義行へ遂に召集令状が来たのです。七日に四平街の戦車隊に入隊するようにとの通知で私達は来るも



郵便絵ハガキ

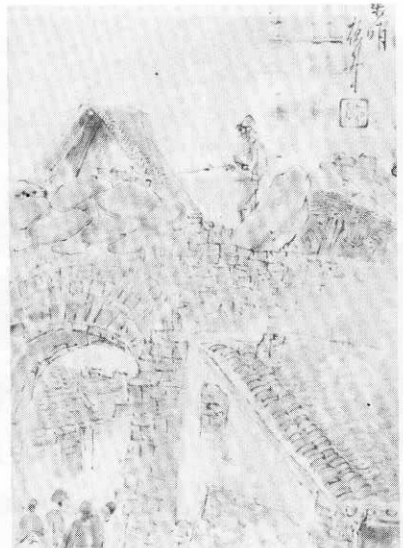
のが来た、というどうしてものがれる事の出来ない現実をつきつけられてしまったのでした。

当時我家は主人、私、満鉄で働いている妹千代の三人で暮らして居りました。妹は、当時の国民病であった結核のため大連の療養所に入院して居りましたが、数日前病院から戦争も苛酷になって来たので自宅療養するようにと云はれて連れて帰って来た矢先の事でしたし、また私も妊娠中でしたので、出征する主人に見ればどんなに苦しかったかと思えます。残される私共にしても少しでも心配かけまいと思ひ相当気を使つたつもりでしたが、今思えば二日間泣き通していたような気がします。入隊する日、主人は社用で出張するかの様子で四平街へ入隊する車中の人となり、それ以来帰郷するまで消息もなく、不安な数年を過しました。

それから私達の生活は全く終戦と同時に浮浪の生活を送る事になったのです。私達の住んで居りました渾江地区一帯は昔匪賊が横行した土地ときいて居りました。八月十五日、駅長から大事な放送があるからラジオの前に集まるようにとの伝いがあり、終戦の知らせに私達日本人はただぼうぜんとし、関東軍も一戦もしないのに...とこぼしをためていきまゝ軍人や、日本帝国は満州の我々を見殺しにする気かと、正常を失つた人々は口々に誰れにぶつけるともなくこれからの日本国がどうなるものか、我々はソ連に行かなければならないとか色々なデマにまどわされたのです。日本人は昨日に変わる今日の姿で、人々は職場を追われ収入の道を断たれた毎日目に余るものがあり、さらばとて内地へ帰る事も出来ずに居りました。そんな矢先、或る晩暴民の襲撃にあつた社宅があり、このままでは安心して暮す事が出来ないため、集結して日本政府から指令が来るまで協同生活する事にし、翌日早々荷物を百メートル程離れた青年隊寮に運んだのです。女手だけの私達は、病人の身の廻りの物と生まれて来る赤ん坊の物だけを運ぶだけが精一杯で、あとは翌日だと思つて居りました。

お昼頃から何処からともなく満人の農民が棒切、カマ、クワ、マサカリなどやあるいは猟銃のようなものを持って、ぞろぞろと約百人位寮の周囲をかこみ、物すごい殺気がみなぎって居りました。私達はこれから何が起るかと思う間もなく、窓から石やレンガが次々ととんで来て子ども達の

軍事郵便絵ハガキ



泣きさけぶ声、大人達の逃げる逃げると云う声と農民の歓声が入り交つて地獄の状態が数時間つづきました。妹と二人手を取りあいながらこうりやん畑を命からがら逃げまわりましたが、衣類、金ほもちろん時計、メガネ、貴金属等手あたり次第はく奪された我々の集団六十数名は、ようやくのことで八道江警察まで避難しました。健康な人達でも見知らぬ六、七程の道を歩いて行く事は用意でないのに、私達二人は病人と妊婦であるため途中八回も暴民の追撃を受け、命からがらたどりついた時には妹も死ぬのではないかと思ひました。伝染病患者であるため誰れも手助けして下さる人もないのに、九州出身の倉本さんという方が良く途中めんどろ見下さつたのには深く感謝しております。途中で別々になりましたし住所を聞くとか話するとかの余裕もなく、今更に残念に思つています。

その妹もそうした事が病気に更に追討をかけ、病は日に日に悪化して行くのですが、医者にかける事も出来ず、ただただ安静にするよりすべもなく、隔離病室として特別あたえられた警察の留置所に満人の罪人と一諸になり、見張人の中で罪人の毛布にくるまりながら、十月になると外の水の薄水をくすりの代りに取つて来て妹に与えた事を思う時、身の毛がよだつ思いがします。床ずれが腰に大きく出来、貼る薬もなく、下が痛いためやわらかい「わらしび」

がほしいと思っても満州はそれもなく、唯々腰に手をあて体をなでさするより外ない毎日でしたが、街に親切な医者か居てどうして聞きつけたか妹のために注射をし投薬し、そして子供たちにはおかゆを煮て毎日留置所にとどけて下さったのでした。地獄で仏に逢うとはこの事で、その方のおかげで最後は鎮静剤を一包いいただき、やすらかなむりについた訳ですが、静かなむりの中から姉さんあれを唄って二人の思い出の唄を唄いながら天国へ行きました。

花つむ野辺の陽は落ちて
みんなて肩をくみながら
泣いて唄った想い出を

おさななじみのあの頃あの友
ああ 誰れが故郷を思わざる

姉と妹はちぎれる程手をにぎり声は声にならず、乱れていた呼吸も薬のために静かになり、安らいだ顔、口は動けど声にはならず、自分が生きている事で姉に迷惑をかけるのと口グセに友人に云うていたとの事、三十三年過ぎて今日ペンを走らせながらも流れ落ちる涙をふく間もない程、当時の悲しみと苦しみにも胸もかきむしられ想いで。その頃、また自分の病氣、子供の死、引揚、途中の苦しみなど書きたいことがたくさんありますが、字数の関係でまたの機会にしたいと思えます。

銃後の断片

南 鷹 巢 笹 原 一 (65)

整理されていないスライド版のように、ひとコマひとコマが繋がらないまま思い出のカケラを拾ってみよう。

両肩に夫の分、右手に家事育児、左手に国防婦人会やら隣り組、何もかも初めての体験をはさむ余地もなく、よくぞ耐えたと思うこの底力、この原動力、明治大正昭和と鍛え抜かれた女の道、意地と忍耐で家を支え国を支えたその人達はいま、深く尊いシワをひたいに刻んでテンポの早い現代にとまどいながらもなお耐え忍んでいる姿はいたましい。

先づ喰うためのこと

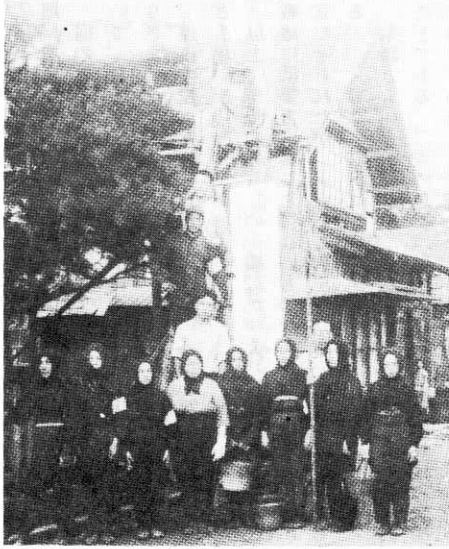
「食糧難」なんていうものでない「鶴の目鷹の目」という言葉がピッタリだ。貧乏も金持もない、喰うためにはどんなものも犠牲にして食に替えた。イサジャやエビナツツをなめてよくもあれだけの重労働や竹槍訓練などに耐えたものだ。体を守るただ一つの寄りどころは越中富山の置薬、精神力の強さ恐しさをさまざまと感ずる。

お金だけでは何も買えない

郵便切手とハガキ位ではお金だけでは何も買えない。それでも一生けん命働いてお金を稼ぎそれに何かを添物してたつたいま使う物だけ買って帰る。でも本当に必要なものは何も買えない。不自由も通りこせば気楽になるというが、ならないことの方が多かった。

大変だった東京行き

殺物は証明書付き、ほかに色んなものを二、三十キロもリュックに詰め、旅行証明をもらって片道十円たらずの汽車賃を工面し知合いに頼んで切符の手配、やっと乗れた汽車は十ワットの裸電球三つ。三人掛けの座ったままで二十時間、悪臭ムンムンの中であくられるようにおにぎりをほおばるのがたつた一つの生き心地。



防空演習

松根油と木製飛行機

堂ヶ岱野や大野台の情緒ゆたかな美しい松並木が切り倒された、根を堀られて刻まれてそれを蒸して油を採った。それで飛行機を飛ばすという、薄板を縦横にはり合せて木製の飛行機を造った。何んの不思議も持たず汗と血豆の空腹の時代を銃後というのだろうか。



実科女学校の軍需工場

亜炭 焚く 汽車

仲 町 神 成 為 治 (68)

戦争末期のそのごく一端に触れてみたいと思うが、ちょうど矢立にいたとき、敗戦という悲惨にぶつかったのである。矢立といえ、昔から、温泉と風穴で名のあったところ。また、交通の便がよく、国鉄白沢、陣場の二駅を擁し、国道、県道、更には沢田や山畑に至る荷車、リヤカー道が四通八達し、当時、交通網では、全郡一を誇ったところでもある。

が然し、青森との県境一帯は、山は高く、雪は深く、よく、駅にも行ったものだが、次第に、敗戦の色濃くなった頃の冬の汽車どもは、その焚く粗悪な亜炭に失調を来たし、矢立峠の行き来は、いずれも喘ぎあえぎのていたらく。それは、その、か細い気笛と共に、全くあてもない動きとしか見られなかったのである。

貧乏のドン底に落ちこんだのもこの頃で、夢のようだが、よい体験だったと、今でも、私はそう思っている。生活必需品の殆んどが、配給にまたねばならなく、履きものもなければ、布もなく、紳士も淑女も、表一枚脱げば、下はヤッコ(乞食)と同じである。

主食も、所要量の半分程度の配給で、その不足はフキとかジャガイモ、うらなりの南瓜までも混ぜたが、それでも腹八分目は贅沢ともいえるものか。

煮干、焼干がわりに、田んぼにイナゴを捕え、鮮魚などは見たくとも見られなく、たまさか、馬豚肉がヤミで手に入っても、全くアブラがなく、その味は大根にも劣り、薪炭は営林署に三拝して、辛うじて暖をとったが、山には伐り出しにも行き、もちろん、焚く前の小切りは自らの手動式である。

ここで思い出されたのが、子供のシラミである。脱がせた下着を、毎晩のように火あぶりしては、いちめんに這い上がる数知れぬ大小を、手早く潰したものが、一向に退

治ができなく、これには弱ったものである。さなきだに、栄養不良で、青白く痩せ衰えているのに、シラミまでが寄ってたかって血を吸うのである。

それでも、どこの子も学校に行つては防空壕を掘り、開煙、増産に精を出し、家業にもよく手助けしたものである。宿のことも苦勞をしたもので、どこの家も荒れ果てていて、貸す家もなければ、部屋も、皆無に近いといったありさま。

連夜の燈火管制、狭苦しい真夏のムシ風呂部屋、これなども思い出の一つである。

以上、当時の暮らしの一端だが、それは私だけでなく、戦地には筆舌に尽くし得ないものがあり、銃後も土壇場に立たせられたが、よくもこれを守り抜いたということである。

余談ともいうものだが、親父が死んだのは敗戦七日前のことである。二人の息子(私からみれば弟)は外地の戦場にあり、心身ともに疲れ果てたのが、その死期を早めた一



姿を消したSL

因ではないかとも思っている。

打ったという電報は着かなく、電話は局間だけ通じた時代で、昼ま、七日市局から白沢局への電話が、私のもとへもたらされたのは夜で、汽車はもうなく、タクシーもハイヤーも一台もない、といったような当時である。

翌くる日、家についていたら一同げげなおももち。既にして葬式の日取りがなされ、知らせるところには知らせをまわしたという。

時に親父は五十九、私はまだ半人前の三十六で、何一つ出来なかつたと、今でも思っている。

あとでわかつたことだが、二人の上が、比島で、一箇月前に既にして親父に先立っていたのである。

逝いて三十三年。先日、法要を営んで、些かながらも二霊を慰め得たと思っている。



分 列 行 進

昭和十八年ころ、旧沢口小学校校庭で……

新京で終戦を迎える

前野 団地 太田見まき子 (58)

戦争当時、もう忘却の彼方へ押流されようとしている年月になってしまいました。当時を体験した者にとつては折にふれ、ふつといろいろなことがさまざまな形になって甦ってきます。物資は不足し物皆すべて配給制、それに先行不安、加えて自信もなく、また命令は絶対服従、道理も理屈も通用せず全く無理が罷り通ったものです。それも皆

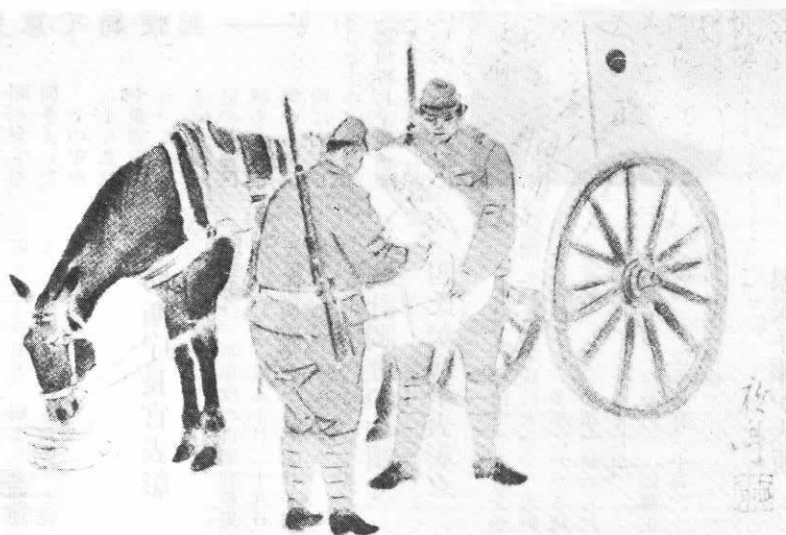
戦に勝つための手段でした。

私は終局真近の満州(新京) 当時を思い出します。戦局が悪化してきた二十年には、日頃なじみ深かった近所の人達も昨日は向い、今日は隣と疎開が始まり、あとに残りし男性にも次々と召集令状が舞込み、留守を預る者にとつては心細さも一入で、親しい者同志がひとかたまりになって起居を共にしました。まだ召集にならぬ者は国都を守るため厳寒の中銃剣術の演習。一つ軍人は、の軍人刺論を体し、真剣そのもの心身共に鍛えられていました。

また、水かけ訓練は、日本必勝を期して何度もくり返しやらされました。この頃になりますと、内地との交流は許されず、ああ我がはからは今頃どうしているやらと思うこと切なるばかりで、海を渡って来た自分がうらめしく遙なるふるさとをしのび日夜頑張りました。

服装も當時空襲に備えて男はゲートル、女はモンペ、寝る時もそのまま、夜は部屋をしめきった上に厚手の防空カーテン、電燈の光も最小限にし、枕元には各自のリュックを置き、サイレンが鳴ると手許のリュックをかつき暗闇を手さぐりで一目散に地下室へ。その上私は臨月だったので、恐怖と暑苦しいので解除のサイレンが鳴るまでもう世も末かと生きた気もなく、流言蜚語は乱れ飛び、不可侵条約を結んだソ連が参戦になってからはいつでも自決出来るように、班長が爆弾を持って歩きました。また、外地なる故いつ反乱がおきるかも知れず、生命の危険がともなっていました。

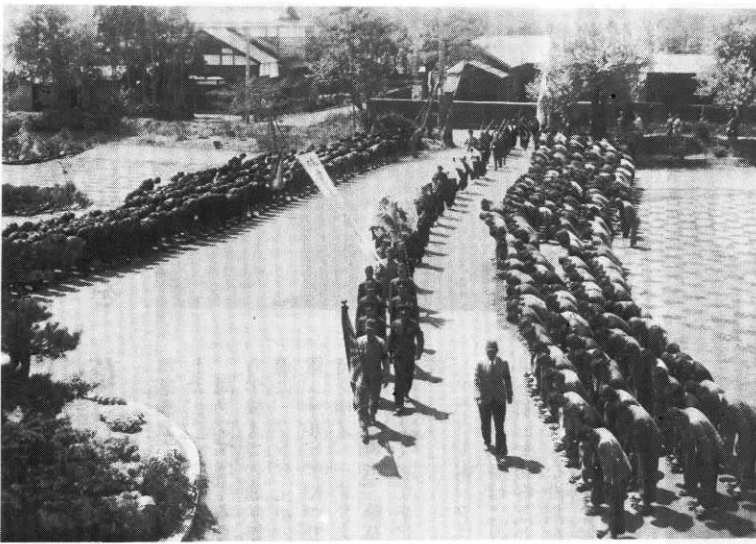
そして長かった戦争もやがて敗戦。戦争がなかったら死ぬこともなかったであろう生後十カ月の幸薄き長男の骨をしつかりと胸に、もう二度と更び来ることも見ることもないであろう新京をあとに、万感胸に迫る思いで懐しの故国へと向ったのです。



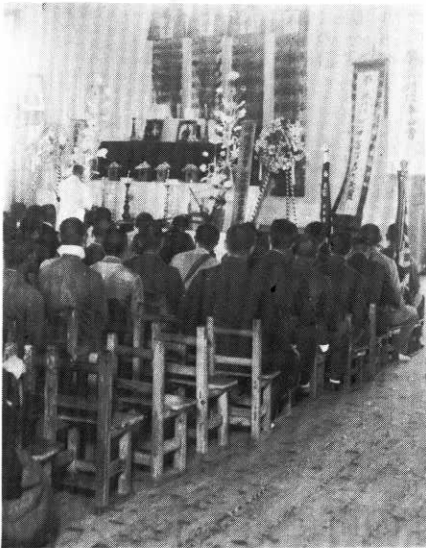
慰問品

軍事絵ハガキ

この企画にあたり、投稿くださいましたかたがた、写真を提供くださいました前山諸橋水蔵さん、綴子藤島源さんのご協力に感謝いたします。



声なき帰還と、合同葬儀



あ
り
が
と
う
農
林
ク
ラ
ブ
に
感
謝
状
農
林
ク
ラ
ブ
を
花
で
飾
る



街の目抜通りを花で飾った鷹巣農林高校農林クラブ（土門幸哉会長）に、十月二十九日、出川町長

にあたった藤原正広先生が出席しましたが、同クラブでは「フラワーボックスはまもなく撤去するが、来春は再び設置、街を花で飾ります」と、話していました。

**松沢、黒森にテレビ
共同受信施設完成**

テレビ難視聴地域解消のため、七日市松沢、黒森地区に共同テレビ受信施設工事を急いでおりましたが、このほど完成。地域の各家庭では鮮明な画面を楽しんでいます。

この総事業費は二百二十万円、内NHKが百八十万円で基幹工事残り四十万円を県、町、関係部落がそれぞれ三分の一ずつを負担して工事されたもので各家庭では山腹に建てられたアンテナ塔から有線でテレビと結んでいます。



**人命救助に威力!!
盛岡医師が自動蘇生器**

盛岡外科医院院長盛岡敬二氏は、このほど町に「救急用自動蘇生器」を贈りました。自動蘇生器は、呼吸困難になったり、人事不省になった場合、人工呼吸と同じように酸素を肺器管に送り蘇生させるものです。町では、贈られた「救急用自動蘇生器」を、公民館の保健相談室に設置しておりますが、各種予防接種などには携帯、救急の必要のある場合は活用することにしており、注射のショックなど緊急時には大きな威力を発揮することから関係者から非常に喜ばれています。

**あけぼの町にポストを
郵便局で意見を聞く会**

鷹巣郵便局では、このほど鷹巣公民館に郵便モニターなど十五人を招いて「お客さまの意見を聞く会」を開きました。その中から主な意見や要望をひろってみると▽舟場地区の配達区域を七日市局から鷹巣局に変更してほしい。このことについては昨年仙台郵政局に出川町長が陳情要請しているが、大字の違いから配達区域の変更はむずかしい状況に



お客さんのご意見を聞く会

防衛庁長官表彰

当町は、本年度の自衛官募集功労者として、去る十月二十九日、三原防衛庁長官から感謝状が贈られました。

**統計調査の功績で
四氏が知事表彰!!**

このほど、秋田市の教育会館で開かれた県の統計大会で、当町から次の四氏が、多年にわたる統計調査員としての功績が認められ、県知事表彰を受けました。
武藤公祐（松葉町） 佐藤正（昭和） 佐藤良春（小森） 加賀松五郎（藤株）

県民手帳が入荷

昭和五十三年用秋田県民手帳が入荷しましたので、予約をした方は役場企画係で、代金二百五十円と引き替えにお受けとりください。

カメラ・ルポ

カメラ・ルポ

『第五回町民つり大会』

太公望でにぎわう

町のつり同好会が主催する第五回町民つり大会が、秋晴れの十月二十三日綴子川陸橋から下流五百メートルの区間に、百五十人の太公望が参加して行われました。競技は、午前十時から午後一時までの三時間にわたってつりを競いましたが、大会に先立って同日朝つり同好会が八十五・約八百匹のニジマスを放流しただけに、太公望たちは制限時間いっぱい、つりを楽しんでいました。

大会の結果は、大人の部で一・四六*をつつた丸島春人さん、子どもの部は八百*をつつた五代儀美成君がそれぞれ優勝しました。



『花開く太田老人クラブ』

長いも栽培で30万円

太田老人クラブ（松尾市治会長）会員六十二人では、十月二十八日長いもの収穫作業に汗を流しました。

同クラブは、昨年、米代川河川敷内の畑地2aに長いも四百本のケース植えを行ったが、作柄は上々、種苗交換会でも入賞するほどの出来栄え。

今年は、面積も3aに増やして七百五十本植え、その後追肥や農薬散布など丹精こめて育ててきただけに昨年に劣らぬ作柄。収穫する老人たちの顔も自然にはこぼる。

収穫した長いもは、栄農協を通じて一般に販売されるが、売上げはおよそ三十万円が見込まれ、会の活動資金にあてられるそうです。

『女性も交えすし食い大会』

優勝は56個ペロリ

県すし商環境衛生同業者組合鷹巣支部のすし屋さんたちが、日ごろの感謝とPRをかねて、十月三十日正午から鷹巣公民館で「すし食い大会」を開きました。

会場には、すしに目のない腹自慢の人たちが大勢詰めかけたが、先着五十人で打ち切り、競技は一般婦人、子どもの三部門で、制限時間は二十分。

最初の二、三人前はペロリとたいらげたが、そのあとは勝負を度外視してゆうぜんと味う人、時計をニラミながらハイビツチの若者、お茶をのみながら目をシロクロさせる小学生など、声援を受けながら奮闘。

結局、一般の部では五十六個をたいらげた二ツ井町の工藤明志さん（30）、婦人は四十個の森吉町菅原セル子さん（34）、子どもの部で鷹小六年の松尾元君が三十四個を食べてそれぞれ優勝。すしをたらふく食べたうえ、豪華な賞品をもらってご満悦でした。



美を求め 心のゆとりを

文化座談会から

秋の文化祭の前に、公民館では去る十月二十四日午後六時半から文化座談会を開き、文化とは何か、町の文化活動はどうあればよいか、文化祭の今後のあり方などについて語りあった。

文化とは

▽ 幕末から明治にかわったころ「ザンギリ頭をたたいてみれば文明開花の音がする。」とうたわれたことがある。文化は大変広い範囲にわたっているし、また時代の流れによってとりあげることから変わってくる。

▽ 美しさを感ずる心、心にゆとりを持つこと、よその人々と和やかに話しあいができることなど、が文化を高めるために大切なことである。

従来からの農民の場合、自分の職業のことには熱心に語るが、他のことには一切関心を持たない気風があった。そこからは何も生まれてこない。

▽ 家庭生活の中で、人との交わりの中で、四季折々の自然の変化の中に、出てくる感動を大切にすることである。それが詩になり歌になり、造形的な作品になるものである。

文化活動について
▽ 心の豊かさ、文化ということばはよく使われているが、概念だけに終ることに警戒しなければいけない。中味と伴ったものにするのである。

▽ 昔の農村には、趣味とか道楽を必要とする気風が強かった。農民こそ美を追求する心が必要であるし、母親たちは教育への関心を高めなければいけない。現在ではその自覚が高まっている。あり意欲的な活動が見えてきた。

▽ 文化活動は人と人との心のつながりである。昔からある念仏



寺田 高橋 花田 三沢

立って考えてみたい。
▽ 郷土の産業、業種別人口など考え、農協や商工会も、産業を理解してもらったための出しものを催した方がよいと思う。

▽ 町民全体の徳性を高めるためにも、そのよりどころとなる文化会館がほしい。資料があり、語り合う場所があり、活動できるホールなど、これからのことを考えるとぜひ必要である。

▽ 社会教育のためには地方紙が大きい役割を果すべきであり、その活用を考えなければならぬ。

座談会メンバー
▽ 芸文協会会長 桜田専蔵
▽ 大館北秋国語教育研究会長 佐藤秀男
▽ 主婦 野崎智佐子
▽ 農業 三沢勇悦
▽ フラワーデザイナー 花田道子
▽ 寺田服装学園長 寺田ヤシ
▽ 農業 高橋文爾
▽ 公民館長 長崎佐太吉
▽ 社教課長 近藤次夫
▽ 司会 読書会々長 松尾昭利

講、八日講から現在の各種サークル活動まで、その雰囲気為何より大切である。いがみあいの中からは何も生まれない。
▽ 郷土芸能も若者たちに伝える活動は大事なことである。時代とともに、その見方がちがってくる。その見方がちがってくるから、表現の形もいくらか変わってゆくものと思われる。

行政書士試験

昭和五十二年度行政書士試験が、十二月七日(水)県正庁で行われます。

受験願書の受付は、秋田市山王四丁目一番一号 秋田県総務部地方課(十一月三十日まで必着のこと。

受験に必要な書類は、受験願書のほか、履歴書、受験資格を有することを証明する書面(高等学校卒業証明書、公務員職歴証明書等)、

戸籍謄本または抄本、身分証明書、写真。
受験手数料は、証紙納付書に一千円の証紙を貼付して提出。
なお、願書の請求やおたずねは総務部地方課へ。

身障二級介護者までバス無料券発行

身体障害者福祉施策の一環として行ってきました身障手帳一級対象者、介護者のバス無料券が、身障二級対象者、介護者まで拡大発行されることになりましたのでお知らせいたします。

冬季スポーツ教室

鷹巣体育館では、次のとおり冬季スポーツ教室を開きます。
冬はどうしても運動不足になりがちです。隣近所おさそいのような多数参加してください。初心者大歓迎です。

教室は、バレーボール、バスケットボール、バドミントン、テニス、卓球の五教室。
期間は、いずれの教室も十二月始めより十週行います。

参加ご希望の方は、十一月二十日から受付いたしますので、鷹巣体育館(電話二一三八〇〇)へ申し込みください。

参加料は五百円。小・中・高校生はご遠慮ください。
なお、教室の曜日等くわしいことは体育館へお問い合わせください。



桜田 佐藤 野崎

鷹巣高校ブラスバンド



第9回

文化祭

カメラグラフ

書道展



「生涯を学習し、文化を広め豊かな町をつくりましょう」をテーマに、第九回鷹巣町文化祭は十一月三日から六日までの四日間、鷹巣公民館、役場、鷹巣小学校の三会場で大に行われました。

会期中は好天に恵まれたこともあって、各会場ともこれまでになく多くの人が訪れ、熱心に展示や演技をみて回っていました。力作ぞろいの展示、熱演に感嘆の声があふかれ、好評のうちに終わりました。

茶席(裏千家)



いけ花展、絵画展

秋の火災予防運動

使う火を消すまで
離すな目と心

十月末現在、鷹巣町の火災発生状況は、

	件数	損害額
本年	七	八、三三二万円
前年	一五一	一九、三七九万円

で、前年に比較し件数、損害額とも半分以下となっております。

しかし、本年と前年あわせて二十二件の内、十五件は冬から春にかけての暖房器具の使用期に発生しており、その原因も▽煙突、風呂釜の亀裂▽四件、▽電気毛布、コタツの取扱い不適▽三件、▽石油ストーブ、プロパンガスの取り扱い不適▽三件、▽焚火等の不始末▽三件となっており、大半はこれから使用回数が多くなる暖房器具の取り扱い不適が原因です。

火災の多発期を迎え、火の正しい取り扱いによる火災の防止と人命の安全を図るため、十一月十三日から一週間、火災予防運動が行われます。

消防署と消防団では、「人命の安全を図る」ことを最重点に、期間中は一般家庭、人の集まる公共建築物を対象に査察指導を行います。署、団員の指導にご協力をお願いします。ととも、もう一度身の回りを点検し、火災のない明るい町づくりにご協力ください。



一線美術会会員 九島素二氏

おしらせ

予防接種

生後二十四カ月から四十八カ月までの出生者を対象に、百日せき、ジフテリア、破傷風の三種混合ワクチンの予防接種を行います。接種日は、鷹巣地区以外の方は二十四日、鷹巣地区の方は二十五日。

十一月の健康相談

成人健康相談は、二十二日です。時間は、午前九時から午後三時まで、血圧測定のほか、必要に応じて尿検査なども行います。

人権相談所を開設

秋田地方務局大館支局などが主催する無料人権相談所が、十一月十七日午前十時から午後三時まで綴子公民館で開設されます。土地家屋の権利問題、親子、夫婦、扶養、相続、登記、戸籍、供託、交通事故等の問題でお困りの

妊婦健康相談は、二十一日です。時間は、午前九時半から午後三時まで。おいでの際は母子手帳を忘れずにお持ちください。また、今月の母親学級は、母乳栄養と妊婦中期の注意について。時間は、午前十時から十二時半まで。※いずれも鷹巣町公民館保健相談室。

善意

このほど鷹巣ボランティアと鷹巣地区民生委員会の方々から、廃品回収の収益金二一、三五二円を社会福祉のために、町社会福祉協議会へ寄付金がありました。ご芳志に深く感謝いたします。

香典返し

このほど次のかたから、香典返しに町社会福祉協議会へ寄付金がありました。ご芳志に深く感謝いたします。▽糠沢川武藤ユミさんから亡夫哲二さんの香典返し 二〇、〇〇〇円

第四回 広報写真コンテスト

「第4回写真コンテスト」を、下記により行っています。あなたの傑作をふるってご応募ください。

記

※課題—ふるさと

町内の祭典や盆踊り、町民の生活、文化、自然など、「ふるさと鷹巣」の姿をじっくりカメラにおさめてください。

※応募締め切り—11月30日

※送り先—鷹巣町役場総務課 広報係

※賞—特選1点、入選5点に賞品、応募者全員に粗品を進呈いたします。

※発表—昭和53年1月1日付け広報紙上および1月15日号に写真を掲載します。

※大きさ—キャビネ判以上の白黒またはカラー。

※その他—応募作品は、未発表のものに限る。1人何点でも結構です。作品には住所、氏名と若干の説明を添付してください。

慶弔だより

10月16日〜10月31日

誕生おめでとうございます

- 近藤 裕樹(茂雄) 二男 旭町
- 小塚 幸子(幸雄) 長女 新舟見町
- 戸沢 識子(元弘) 長女 前山
- 鈴木百合子(稔) 二女 下町
- 花田 智秋(義憲) 長男 掛泥
- 金沢 学志(憲一) 長男 新田中
- 村上 大達(儀平) 長男 太田
- 武田 慎平(馨二) 二男 今泉
- 籾内 健志(軍英) 長男 今泉

- 藤島 蘭子(健一) 二女 太田
- 小玉智恵子(富夫) 二女 高野尻
- 小塚美紀恵(武雄) 長女 堂ヶ岱
- 長岐 義行(直介) 長男 七日市
- 加藤 美里(由和) 二女 西住吉町
- 石川 貴久(直英) 長男 三吉町
- 高坂 拓哉(正平) 二男 羽立

二人の前途を祝福いたします

- 清原 繁雄 合川町
- 藤島 孝子 旭町
- 七尾 専次郎 田中
- 齋藤 光恵 大館市
- 神成 一幸 小森
- 高坂 千保子 深岡
- 小坂 文孝 摩当
- 竹谷 静江 大館市
- 長谷川 正博 太田
- 平 千恵子 埼玉県
- 柴田 秀春 森吉町
- 落合 まさ子 掛泥
- 柴田 まさ子 森吉町
- 植田 洋子 森吉町
- 千葉 悦子 伊勢町
- 奈良田 勝正 旭町
- 加賀谷 恵子 綴子上町
- 岩本 俊悦 大館市
- 吉田 隆子 西住吉町

おこやみ申しあげます

- 三上 スエ(83歳) 三ノ渡
- 田村 栄(62歳) 岩坂
- 庄司利太郎(64歳) 材木町
- 千葉 光雄(38歳) 東横町
- 武藤 哲二(54歳) 糠沢